

ちよつとしい話

～雨ニモマケズ～

深く佛教に帰依した詩人がいました。その人の名は、宮澤賢治です。彼は、1896年に生まれ、1933年に短い一生を終えています。彼の生家は浄土真宗を信仰していましたが、彼は、日蓮宗をこよなく信奉していました。そんな彼の詩、「雨ニモマケズ」の中にお釈迦様の出家理念が入っています。皆様よく知ってみえると思いますが、お忘れの方もみえると思いますのでここに詩の全文を記します。

「雨ニモマケズ」

雨ニモマケズ 風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ

丈夫ナカラダヲモチ

よく 慾ハナク 決シテ いか 瞋ラズ

イツモシヅカニワラッテイル

一日ニ玄米四合ト

味噌ト少シノ野菜ヲタベ

アラユルコトヲ

ジブンヲカンジョウニ入レズニ

ヨクミキキシワカリ

ソシテワスレズ

野原ノ松ノ林ノ陰ノ

小サナ^{かや}萱ブキノ小屋ニイテ

東ニ病氣ノコドモアレバ

行ッテ看病シテヤリ

西ニツカレタ母アレバ

行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ

南ニ死ニソウナ人アレバ

行ッテコハガラナクテモイトイイ

北ニケンクワヤソショウガアレバ

ツマラナイカラヤメロトイヒ

ヒデリノトキハナミダヲナガシ

サムサノナツハオロオロアルキ

ミンナニデクノボートヨバレ

ホメラレモセズ

クニモサレズ

サウイウモノニ

ワタシハナリタイ

お釈迦様が出家を決意されたとされる要因についてお話します。

ある時、お釈迦様が城の東門を出ると、そこには腰が曲がり、醜い姿の老人が杖を頼りに立っていました。このことは、人間として生を享けた者は、皆年をとっていくのです。佛教では、老いの苦しみと言います。またある時、お釈迦様は城の南門からでると、蒼白な顔で苦しみもがいて倒れている者がいた。佛教では、これを病によってうける苦しみと言います。またある時、お釈迦様は城の西門からでると、悲嘆と絶望にくれた葬送の列に出会いました。佛教では、これを死の苦しみと言います。またある時、お釈迦様は城の北の門から出ると、木下に一人の修行者が座して瞑想していました。お釈迦様は、静かに「あなたは、どなたですか？」と、その者にお尋ねになりました。その者は、「心の安らぎと揺るがない不滅の境地をつきとめるために出家し、修行を重ねているのです。」と答えました。佛教では、これを生きる苦しみと言います。お釈迦様は、以上の悩みを解決するために出家されたのです。時に、御年 29 歳でした。

以上のことから分かるように、宮澤賢治はお釈迦様の出家された事跡に感銘を受け、「雨ニモマケズ」の中にその意図する所を記したのではないのでしょうか。現代においても、生命の尊厳は守り続けるべきであり、軽んずべきではないのです。「無量寿経」の中に、天下和順し、日月清明なり。風雨時を以てして、災厲起こらず、国豊かに、民安くして、兵戈用いること無し。徳を崇め、仁を興して、務めて、禮讓を修す。と諭されています。ありがたいことです。

善入院油掛地藏尊